

窪田順平監修／承 志編

## 『中央ユーラシア環境史』 2 国境の出現』

臨川書店 二〇一二・三刊

四六 二七〇頁 二八〇〇円

本書は総合地球環境学研究所の「民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷」（通称「イリプロジェクト」、代表窪田順平、二〇〇七～二〇一一年）の研究成果を書籍化したものである。このプロジェクトはイリ河流域をユーラシア中央域の核の一つとしてとりあげ、分野を越えた視点から環境と人間の関わりを明らかにすることを目指したものである。本巻は特にユーラシア大陸の中央に位置するこの地域が現在のような「国境」に変貌する過程を歴史学的に解明することを目標としている。

第一章「帝国支配と国境の誕生」は総論である。杉山清彦「イリ地域をめぐる帝国の興亡と国境の誕生」（論文副題は省略。以下同様。）はこの地域の地理的、歴史的背景を概説した後、一七～一八世紀におけるジュンガル、大清国、ロシアという三帝国の角逐を描き、さらにユーラシア帝国としての大清国の中における新疆の位置づけについて論じる。承志「中央ユーラシアにおける「国境」の誕生と遊牧の実態」では大清国とロシア、ジュンガルとの間で行われた境界画定と、それ以後の境界の巡視、境界地域の遊牧民の管理が論じられる。

第二章「小氷期と遊牧集団の移動・適応」も二篇からなる。サ

ムビルデンデヴ・チョローン（加藤紀子訳）「十七世紀ユーラシアにおけるモンゴル遊牧集団」は、ロシア語の未刊行文書を利用して一七世紀のモンゴル人の移動や社会の変化を明らかにしている。野田仁「歴史の中のカザフの遊牧と移動」はカザフ遊牧集団の社会構造を紹介すると共に、一八～一九世紀の気候変動と集団の移動、そしてロシア帝国の下での社会の変化について論じる。

第三章「農業大開発と移民社会の形成」の二篇は共に華立によるものである。「清朝時代におけるイリ渓谷の農業開発」では、清朝によるイリ地域への様々な集団の移住と多様な屯田形態を紹介している。「イリ九城点描」は清朝による新疆統治の中心であったイリの九つの城の様子を人口や経済活動を中心に描いている。

また本書は二篇のコラムを含む。小沼孝博「遊牧国家の資源利用」は遊牧国家ジュンガルの下での農業と交易の実態を、承志「シベ集団の移住とその後の生活」はシベ集団のイリ地域への移住とイリでの生活、辺境警備所の様子などを描いている。

本書所収の論文は、環境と関連させて分析することにより、当時の社会や国家の姿やその変化を具体的かつ説得力を持って明らかにしている。また丁寧な概説と当時の状況を生き生きと描写する史料の引用はこの時代と地域を理解する上での良い手引きとなる。

ただし本書での「国境」とは、大清国、ジュンガル、ロシアの間で一七、一八世紀に画定された境界を指し、近代的な国境の概念とは異なるものである。この地域の辺境化の考察には一九世

紀後半以降についての研究が必要である。

(上出徳太郎)